

高砂神社

常夜灯

1799 年に建てられた石でつくられた灯籠です。元々は瀬戸内海東部の播磨灘の海岸に面し、船舶の行き交う灯台の役割を果たしていました。こうして町は人気の港、重要な交易所、そして地域の中継地点として発展しました。後に移設された常夜灯は現在高砂神社境内に設置され、旅の安全を祈願しています。

本殿

高砂のシンボルであるこの神社は、約 1,700 年前に海岸近くに建てられました。砂浜と松の木がこの場所を魅力的にしていたと考えられています。その後、城を築くために神社を移転し、更に現在の位置へと移転しました。本殿の屋根には、猛々しい顔を模った瓦があり、悪霊を追い払い、海で人々を守り、恋愛に幸運をもたらすと信じられています。

能舞台

2013 年に、能『高砂』の舞台とされる場所としてこの能舞台が建てられました。この劇は、ユネスコ無形文化遺産で日本の伝統芸能である「能」の第一人者とみなされている役者で、劇作家の世阿弥元清（1363～1443）によって書かれました。劇中、歌手は歌います：「高砂から湾を越え、

湾を越え、潮とともに月が消え、淡路島の影を越え、海を越えて鳴尾まで、住吉（すみのえ）に着く、住吉（すみのえ）に着く」。夫婦和合を想起させるこの歌には、現在の兵庫県と大阪府のいくつかの場所が登場します。

大きな能舞台は、この劇を祝うため、そして永続する町と夫婦和合の繋がりを強調するために、地元の人々によって建てられました。舞台に描かれた松の木には3つのハートが描かれています。3つのハートをすべて見つけると幸せになれると言われています。

相生の松

「相生の松」として知られるこの由緒正しい松は、同じ根から生えた2本の松から成ります。赤松は雌、黒松は雄と考えられています。能曲『高砂』ではこの木が夫婦円満を象徴する赤い松と黒い松として描かれています。劇中の高砂の謡は、日本の伝統的な結婚式でよく披露されます。

工楽松右衛門像

高砂出身の工楽松右衛門(1743-1812)は廻船業を営み、土木工事を行いました。彼は、船に使用される、木綿で織った松右衛門帆を発明し、日本の海運業界に多大な影響を与えました。この丈夫でしなやかな素材は全国の船で帆に用いられました。

工楽の土木事業は、高砂を含む港の港湾施設の改善にも貢献しました。他に恩恵を受けた港には、
広島の手の浦、北海道の択捉島と函館の 2 つの港が含まれます。